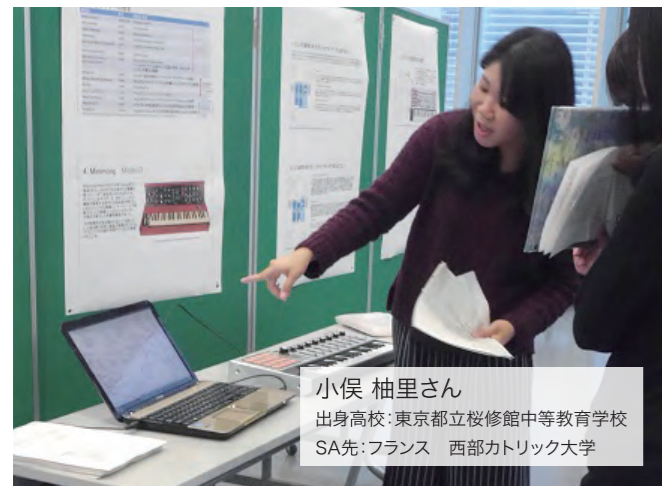


本学部には4つのコースが設けられており、それぞれのコースに、基本的視野を身につけるための「基幹科目」と、より応用的な内容を扱う「専攻科目」が置かれています。学生は、複数コースの「基幹科目」を履修することで視野を広げながら、自身の選択したコースの「専攻科目」を重点的に履修し、専門性を探求します。

情報文化コース

情報を収集・分析・編集し、 新たに発信する力を養う

現代において「情報」が思考や生活の基盤になるとの立場から、人間を主体に「文化」と情報の分析・編集・構成との関係性を学びます。現代思想、生物多様性、こころ、ロボット、インターネット、映像音響、デザイン、コンピュータ、人工知能、VRなどグローバルな領域で研究、作品制作、フィールドワーク、教員養成に取組みます。



小俣 袖里さん

出身高校：東京都立桜修館中等教育学校
SA先：フランス 西部カトリック大学

Course Recommendations

-印象的だった授業-

ネット文化論

コンピュータや携帯電話等、身近な物を題材にインターネットの仕組みや歴史、その特性について学ぶ講義。インターネットの発展により瞬時に情報のやり取りが可能になった現代を「ネット社会」と呼びます。ネットビジネスやネットリテラシー等、ネット社会を構築する文化について様々な観点から見つめ、その中で自分がどうインターネットと関わっていくかを考えていきます。

情報産業論

テレビや新聞のような各種マスメディアの提供するサービスを基に、情報産業の将来を展望する講義。「インターネットによる動画配信サービスが普及する中、放送業界がどのような試みを行っているか」、「オリンピックに向けて映像・音響技術がどこまで向上しているか」等、今まさに行われている事業について学ぶことができ興味深かったです。授業の後半ではNHK放送技術研究所を見学し、最新の放送技術に直接触れることができます。

メディア情報応用

Flashというソフトを利用してアニメーションやゲーム等の作品を制作し、コンピュータを用いた自己表現の手法を学ぶ講義。アニメーションの動作をFlashで処理することで簡単にイラストを動かすことができるモーショントゥーンや、プログラムを記述してゲームのような複雑な処理や双方向性の実現を可能にするアクションスクリプトといったFlashの各機能を一つ一つ勉強していきます。講義でしっかり基礎を学ぶことで、講義後も個人でより発展的な作品作りを目指すことができます。

表象文化コース

アート、音楽、舞台、映画、ダンスなど 様々な芸術表現について学ぶ

表象文化の学習は、表象された対象を知ると同時に、表象する視点を知ることの意味します。つまり様々な芸術表現に触れることで異なった地域や時代の人々の思考・価値観・感受性を追体験し、自分を豊かにしたり、未知の他者の心に訴える表現活動をしたりする道が開けるのです。SA中の芸術体験の意義が増すのはもちろんとして。



井上 さつきさん

出身高校：東京都立小金井北高等学校
SA先：カナダ ブロック大学

Course Recommendations

-印象的だった授業-

五感共生論

普段意識せずに使っている五感が我々人間にとってどれだけ重要なものなのか、課題制作等を通じて学ぶ授業です。課題発表の際は作品についての質問や感想など、学生の意見が活発に交わされ、他の学生から刺激を受けられる授業でした。例えば、「紙を用いて、聴覚を刺激する動画を制作する」という課題が出されたときのこと。先生は「音が聞こえてきそうな作品」という意図で「聴覚を刺激する」というテーマにされたそうなのですが、紙を破った音を録音した人がいて、柔軟な発想に驚かされました。

ポピュラー音楽論

ジャズ、ブルース、カントリー、ロック、パンク、ヒップホップなどポピュラー音楽の盛衰の背景を学びました。扱う音楽は洋楽が中心だったのですが、洋楽に詳しくない私にとっても楽しい授業でした。ファッションや音楽以外のアート、政治などとの結びつきについての話や、時には定説とは違う先生の見解も交えたお話をしてくださいました。どんな話を聞けるのだろうか毎回ワクワクして出席していた授業のひとつです。

メディア表現ワークショップ1

授業では現代美術を中心に様々な作品や作家が先生が紹介してくださいました。個人的には、「4分33秒」を作ったジョン・ケージの他の作品を知ることができて面白かったです。課題は授業で紹介された作品に関連して出されるのですが、変わったものばかりでした。仮想生物を考え設定などをスケッチブックに描く、人工物の写っていない写真を撮る、踏切やメトロノームの音のような連続する音を録音するなど、普段取り組むことのない表現を模索するのが楽しい授業でした。

言語文化コース

各言語圏特有の文化を掘り下げ、 文化の多様性を探求する

SAプログラムの対象である英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語の各言語圏の文化や、世界の中の日本文化についての知識を身につけます。設置科目の内容は言語学、文化史、思想史、文学、現代事情など多岐にわたり、言語そのものや、言語が生み出す文化の多様性を、広い視野で学びます。



御子柴 亮介さん

出身高校：東京都立竹早高等学校
SA先：イギリス シェフィールド大学

Course Recommendations

-印象的だった授業-

言語文化概論

SA参加が必須である国際文化学部生にとって、異なる文化や価値観に目を向けることは大切です。言語文化コースの科目群では英語圏の文化、中国の文化などといった、異文化について学ぶ授業が多数置かれています。日本に住む私たちと、異なる当たり前(=文化)を持つ人々が交流する際、私たちはお互いの「当たり前」を尊重しなければなりません。それは「当たり前」を考え直すことでもあります。「言語文化概論」では、ポスト構造主義という思想を学ぶことを通して、当たり前がいかにか恣意的で脆いものかということに気付かせてくれます。

中国の文化Ⅲ(日中文化交流史)

国際社会において、他国との関係性は大変重要なものです。隣国である中国との接し方について、人それぞれに様々な考え方がありますが、多数派の(ように思われる)イメージを妄信するのではなく、自分で考え判断することが大切です。これまでの歴史や文化を知ることが、判断材料のひとつとなります。この授業では中国と日本のこれまでの関係性を学ぶことで、「国と国」というレベルだけでなく、同じ人間として私たち個人のレベルで隣国の人々どう付き合うべきか、考えることができます。

世界とつながる地域の歴史と文化

国際文化学部には、留学生や希望者が参加するSJ(スタディ・ジャパン)というプログラムがあります。この授業ではSJ先の長野県下伊那郡について学びます。異文化と聞いて外国を想像される方がいると思いますが、異文化とは海外のみを指す言葉ではありません。下伊那郡と千代田区の文化が異なる様に、国内にも異文化は存在します。下伊那郡の中でも地域ごとに違いがあります。日本の伝統文化を学びながら、同じ文化も細部を見れば違いがあるといった様な、文化比較をする上で大切なことも学びます。

国際社会コース

国際社会の交流と仕組み、 その問題点と解決方法を探る

21世紀は商品やサービス、人の移動が盛んなグローバル化の時代といわれてきました。その一方で、新興国の台頭による秩序のゆらぎは、若い世代が生きる近未来が波乱に富むことを予感させます。国際社会コースでは、多様な文化に共感しつつ、普遍的な価値は何かと問い、新たな世界を創り出すために力を発揮する人を育てます。



小島 シティマイ百那さん

出身高校：東京都立晴海総合高等学校
SA先：スイス ザンクトガレン大学

Course Recommendations

-印象的だった授業-

間文化性研究翻訳論

どの文化に属するかによって、発する「ことば」の持つ意味やイメージは人それぞれ異なります。世界史の中で「東インド」と名の付く会社が登場しましたが、この会社の名前をつけた人はどのような常識を持ち、どのような視点から世界を見ているのでしょうか。この授業では、ある社会や文化に属する人々の持つ常識や、その時代背景によって変化する「ことば」の意図を明らかにし、「ことば」を通して文化に対する理解を深めていきます。

異文化と身体表現

身体をどのように動かすか、ということも文化によってさまざまな違いが生まれます。例えば、日本の伝統芸能である歌舞伎や能に登場する、腰を落とした低重心の基本姿勢は、日本の田植えや農作業における基本姿勢と合致しています。この授業ではバレエや歌舞伎、京劇といった、芸術として確立されたものや、世界各国の伝統的なダンスなど、さまざまな文化圏に存在している身体表現から、所作に息づく文化的背景を比較、考察します。

宗教社会論Ⅱ(キリスト教と社会運動)

聖書などに登場するキリスト教思想が、社会を変革するための理想と結びつき、これまで何度も世界各地でキリスト教思想に基づく社会運動が展開されました。この授業では、社会が抱える貧困、ジェンダー、人種差別などの問題を、キリスト教思想を用いて人々がどのように解釈し、新たな社会思想がどのように生まれるのかを考察します。キリスト教思想という1つのものさしを深く知ることで、自分の持つ価値観や定義を再構築できます。